

# 自由な表現の翼を広げよう

## ——愛晃会文化賞に寄せて

愛晃会文化賞審査委員長

田 近 洵 一

東京学芸大学名誉教授

元早稲田大学教授

### 総評

今年も、愛晃会文化賞の応募作品を通して、晃華学園の皆さんの素晴らしい知性と感性の輝きに出会わせていただきました。若いからこそ書けると思うような作品が多く、正直言って、素晴らしいなあと思いました。学校の勉強とは関係なく、自分の表現したいことを自由に書いているから、その若い力が素晴らしいのです。自分の目を見たこと、自分が体験したこと、そして、心に自由に思い描いたことを言葉にする、そこに生まれる個性的な表現が素晴らしいのです。

今年の文化賞応募作品で、審査委員の皆さんの心を特に強く打ったのは、「体験記」としながらも、自分の体験に根差して思うことを書いた石原さよさん（高1）の「共にめざす未来」という文章でした。このような体験をする高校生がいるということ、そして、その体験に基づいて、貧困や差別を克服してだれもが共に生きる「理想の社会」の在り方を考える高校生がいるということが、感動的でした。体験に基づく文章の大事さを改めて思わせられました。

今年度の応募作品でも、特に目立って多かったのは小説でした。そして、その小説の多くは、自分と同じ世代の少年、あるいは少女を主人公とした友情の物語、あるいは冒険の物語で、しかもファンタジックな物語でした。多分、若い皆さんにとっては、自分のプライベートな体験を書くよりも、フィクションの方が書きやすいのかも知れませんね。

私は、個人的には、若い人に、友人とのことや家族とのこと、そして何よりも自分自身のことなど、もっと日常の体験に視点を置いて、若いからこそその悩みや喜びを書いてほしいと思っています。でも、皆さんには、そのような個人的なことはなかなか書きにくいのかも知れません。だから、応募作品には、虚構（フィクション）の小説が多くなってきているのでしょう。もし自分自身の事が書きづらいのだったら、フィクションでもいいですから、自分が思っていることや悩んでいること、特にこうあって欲しいと願っていることなどを、登場人物に託して、しっかりと書き込んで欲しいと思います。

小説以外にも、今年は、優れた作品がたくさんありました。しっかり調べて書いた研究レポートがなかったのは残念でしたが、意見を書いた文章にはいいものがありましたし、また感性のひらめきを見せた詩にもいいものがありました。様々なジャンルの表現に取り組んでいるのも、この文化賞のいいところだと思います。

改めて言うまでもありませんが、この愛晃会文化賞は、晃華学園に学ぶ中・高生の皆

さんにだけに与えられた表現の場です。こんな恵まれた表現の場は、他の学校にはありません。皆さんにだけ与えられた若い知性と感性の輝く場なのです。そのことを考えると、この文化賞の応募者が、中学二年生を除くと、きわめて少ないということが残念でなりません。このような自己表現の場があることを誇りに思ってください。そして、来年は、もっと幅広い皆さんの、積極的な参加を強く呼びかけたいと思います。

## 作品評

### 愛晃会賞(最優秀賞)

#### I・S「共にめざす未来～米国サマープログラム体験記～」(体験記、高一)

筆者は、アメリカでの社会奉仕体験を通して、社会的弱者と言われる人々のために自分たちに何ができるかと考えます。そしてまず第一にすべきは、最低限の食糧を保証するシステムの構築であり、第二は、より深い人間関係を築くための基礎教育の保証だと考えます。このような考えの基礎には、筆者がボランティアで参加したホームレスシェルターでの体験があります。そして、さらに筆者は、第三に、障害を持つ人々への雇用の保証と、そのことによる社会参加の重要性を指摘します。このような筆者の具体的な主張の根拠には、すべて筆者自身がボランティアで参加したことなどの具体的な体験があります。「社会的弱者を見捨てない社会、一緒に抱えあいながら生きていく社会」という筆者のことは、自らの体験に根差した意見だからこそ真実みがあります。

筆者の社会奉仕の体験と、その体験から生まれたヒューマンな考えに頭が下がりますが、それを描いた筆者のリアリティーのある文章も、説得力があつて納得させられます。体験に根差した文章の力です。

### 審査委員長賞

#### S・Y「るりちゃん」(小説、中二)

主人公の「ぼく」がまだ幼い頃死んだ母は絵本作家でしたが、その母の本に「ぼく」は魅力を感じず、中学生になって美術部に入っても、自分の才能にコンプレックスを感じ始めていました。そんな「ぼく」が母と一緒に来た川に来て、落としたブローチを探しているるみちゃんという幼い女の子と出会います。ぼくは、いっしょに探して上げる約束をして、翌日も、そのまた翌日も川に来て、るりちゃんちゃんといっしょにブローチを探します。三日目、るりちゃんは、お母さんから聞いたという詩のような話——みんなの思い出が集まってできている星たちがうっかり落としてしまった星のかけらを集めて作ったのが、そのブローチだという話をします。その翌日、ついにそのブローチを見つけてやったのですが、るりちゃんは、油性ペンで石に二人の名前と「また あうひまで」と書いて去って行ってしまいます。るりちゃんと別れて帰った「ぼく」は、父から「るりちゃん」という題の「母さんの絵本」を渡されますが、その早く死んだお母さんの書いた絵本の中には、お母さんと川のそばにお星さまを見に行くるりちゃんという女の子のことが描かれています。ぼくは、「その先は知っている」と家を出て、川のそばに行きます。川のそばでのこと……るりちゃんとの出会い、そして川にブローチを探したぼく、星たちが思い出のかけらを集めて作ったというるりちゃんのブローチ……それ

らは、みんなお母さんの絵本の中に描かれていたことだったのです。ぼくは、お母さんの絵本の世界を生き生きと生きたのでした。ぼくは、一人の少年として生き生きと生きた、そんな絵本が描きたいと、初めて思います。初めてぼくは新しいのちを生きたと言ってもいいでしょう。この作品は、そんな亡くなった母の想いの中に生き、新しく生きる意志を抱いて生き始める少年の想いを描いたもので、詩的な感性に生まれた美しい作品だと言っていいでしょう。

## 優秀賞

### ○・N「幸せの本」(小説、中二)

学校の図書館から借りてきた本に、いつの間にか混ざっていた一冊の不思議な本、その本の最初の三ページ目には「助けて」と書かれており、そこに書かれてある意味不明なことを不思議に思いながら読み進めている内に、主人公の女の子「紅」は、自分のクラスにも同じようなことがあることを思って、この本の中の人物を助けて上げたいと思い、あの本の悩みが誰のものなのかを探し始めます。一方、クラスには複雑な人間関係があるのですが、ある時、転校生の男の子「真白」から彼の悩みを打ち明けられ、紅は「真白を助ける」と決意して、あの本を真白に見せます。その本の中身は、まさに真白のもの、そして、紅は真白のことを思う気持ち書いた後ろの方ページを真白に読ませます。ところが、実は、真白も表紙の色の違う同じ本を持っていて、紅がページを繰っていくと、そこには真白の紅への手書きの手紙があって、「あと、一番伝えたいことがあります」と言って、真白は、「紅のことが好きだ」と言います。こうして不思議な本のおかげで、二人は本音を言い合いますが、その時、その本は二人の前から消えます。二人の悩みが解決した時、同時にその幸せの本も消えたのです。この幸せの物語の最後は、薄暗い図書室のカウンターに座る一人の「別世界の人間」の登場で終わります。彼女は、すべては自分が作った本だと言い、「このまま皆幸せになればいいな。」とつぶやいて、部屋を出て行きます。「幸せの本」とは何だったのでしょうか。まるで人の運命までもが書かれているように見えながら、実は、幸せの本の中身は、幸せを求める人がいてこそ書き込まれるものだったのではないのでしょうか。そんなことを思わせる作品でした。奇妙な幸せの本を仲立ちに、現実がすべてファンタジーとして展開する不思議な物語で、中二の作品とは思えない、作者の優れた才能を思わせる秀作でした。

## 優秀賞

### T・M「平和な世界を」(意見文、中二)

社会的な問題に目を向け、ものごとを純粹に見ることのできる中学二年生らしい意見文として、好感の持てる文章です。

作者は、小学校六年生の修学旅行で行った広島での見聞をふまえて、この平和な時代、私たちが忘れてはならないものは何かをふり返り、平和な世界をつくる上で大事なことについて考えていっています。筆者は、まず、「違う文化を持つ人」と対話し、異文化を受け入れることの大事さについて強調します。そして、異文化共生といった現代の課題に応えるための第一歩として身近なところに目を向け、「自分のわがままを我慢することや人の気持ちを思いやること」とか「家族への感謝の気持ちを大切にしたい」「生

きている自分を大切にする」など、具体的な問題を取り上げます。素朴ながらも大事なことを押せていて、実感に支えられた意見文になっています。突っ込み不足ではありませんが、異文化共生の思想が根底にある真実みのある意見文として高く評価したいと思います。

## 優秀賞

### H・M「盆踊り太鼓が伝えている事」(研究レポート、中二)

小学三年生の頃から練習してきた地域の「盆踊り太鼓」のすばらしさを体験的に知っている筆者は、今年はオファーがかからないことになったのはなぜかという疑問を持ち、「近所迷惑だと思っている人がいるから」と聞いてショックを受けます。そして、「何故現代の人たちは、皆と一体になれる盆踊りに積極的になれないのだろう」と考えます。そして、「先祖の霊を慰め、供養する」という意味があるのに、そんな「昔ながらのお盆の行事としての意識」がなくなり、盆踊りの輪の中に入って踊るといったコミュニケーションの意識が薄れるとともに、盆踊りが騒音に聞こえてしまうようになっている現代の問題について考えています。そして、筆者は、お盆の行事という意識が薄れていっている現代の問題に悩みながら、自分のできることとして、太鼓の打ち方を考えようとしています。

自分の盆踊り太鼓の経験をもとに、伝統行事の大事さについて確認するとともに、現代の問題について問題を投げかけた文章になっています。小品ではありますが、地域の盆踊り太鼓に打ち込んできた筆者ならではの実感のこもった文章として、好感が持てます。

## 高一・海外研修くパディントン賞

今年度の「海外研修記」は、ホームステイを中心とした紀行文としても、また語学研修の記録文としても優れたものが多く、「パディントン賞」として、阿部裕里香さんと河村珠実さんの二人ということになりました。

## パディントン賞

### A・Y「ユニオンジャック」(高一)

ホームステイでの毎日の出来事を、小見出しを立てて細かく記録した、優れた語学研修体験記です。特に、自分を迎えてくれた時のホストファミリーの様子や心遣い、ホームステイが始まってから気づいたこと、例えば、誰かが寝ている時は静かにするとか、朝からはあまり野菜は食べないとか、日本とは違う生活スタイルと出会って感じた違和感、それでもすぐに縮まっていった距離感など、日々の体験が具体的に描かれていて、ホームステイ生活の記録として、中身の充実したものになっています。

体験としては、特に、日本の一般家庭では経験できないような生活、例えば、自由放任主義の生活、チーズケーキ作り、アクティビティーでの乗馬、近所の人を招いての庭でのパーティーなど、また逆に、折り紙を教えたり、お好み焼きを作ったり、せんべいを出したり、浴衣を着付けて上げたり……日本文化を伝えたこともいい経験だったと思

います。

「最後の最後まで M a r i a の優しさに包まれていた」というエピソードは、端的にこのホームステイのすばらしさを語っています。でも、最後には、「ロンドンが怖くなって安全な日本に帰りたい」ということもあったのですね。それも海外研修です。日本に帰りたいという思いも含めて、イギリス文化を学ぶと同時に、日本文化の良さを再認識した海外研修の記録として、この作品は、一生後に残ることでしょう。

## パディントン賞

### K・T「イギリス語学研修」(高一)

ロンドンで見学したものごと、ホストファミリーとの出会いとその後の生活など、この筆者は、海外研修で特に印象に残ったことを中心にまとめていますが、中でも語学研修記としてユニークなのは、異文化との出会いの体験、そこでの緊張感や違和感など、たった一人の日本人として感じたこと、思ったことを素直に書いていることです。「かっこいいなあ」と思ったイギリス人家族の様子、弟のような八歳の L u c a との遊びなど、初めての体験が生き生きと描かれています。

そんな中でも、特にリアルに描かれているのは、日曜日、ファミリーとスーパーの外にある小さい広場に行った時のことです。遊具で遊んでいる時、「Japanese rude」という侮蔑的なことばを耳にします。丘の上から素晴らしい景色を見下ろし、イギリスに来たんだという実感を持っている時だけに、そのことばは、ショックだったのだと思います。「子供に言われたのは心に突き刺さった」という、その時の筆者の心の内を思うと、読んでいて胸が痛くなります。でも、それも、海外研修だからこそその体験なのです。

ファミリーたちとの別れの場面も、「See you later」というつもりだったのに「Good bye」と言って「後ろを向くと突然涙が出てきた」とは、その時の心理状態を語っていて真実みがあります。

この海外研修記は、イギリスで体験した事実をリアルに描くことで、自身の実感を素直に表現しています。この筆者こそその体験記として高く評価できる作品だと思います。